
ノクターン【SS】

Bowie

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノクターン【SS】

【Nコード】

N9422E

【作者名】

Bowie

【あらすじ】

淡い初恋は思わぬ結末へ…………。ちよっぴり切なくなる初恋のSSです。

黒板消しを挟んだ距離。

それが二人の距離。それ以上近づくことは決してなく、そして、遠ざかることも同じくない。

違う高校へ通うってことが、こんなにも辛いなんて。気付きもしなかった。

そういうことばかりだ。近くに、当然のように存在しているものに、人は特別を感じない。だって、当たり前なもの。

それでも、そんな当たり前が永遠に続くわけではない。

私にとっても、同じだったらしい。

片思いの人と、別々の高校へ といっても、向こうは私のことなんてクラスの女子の一人としてしか見ていないだろう。

自分で認めるなんて切ないけれど、これが真実。もちろん告白など出来ようもなく、一年はちらりと彼を見ているだけで過ぎて行った。

卒業式の日、私は勇気を出して安部くんに話しかけてみた。

だけど、『好き』の言葉は最後まで言えなかった。

「高校でも……お互い頑張ろうね」

「ああ、そうだな。何高？」

まだ冷たい風が、私たちの間を通り抜けた。まさに私に突き刺さる現実といった感じだった。

これはヒドイ、本当にヒドイよ。私はあなたがI高に行くって知ってたのに。

顔では一生懸命作り笑いをしたけど、心はガクンと下を向いていたような感じだった。

それで会話は終了し、私たちは全く別々の道へ。

それでも、いくら違う道だって、彼があんな風になるなんて思っ

てもみなかった。

昼下がりの光の中見た彼の背中が、とりあえず安部くんを見た最後になった。

安部くんと同じ高校に行った友だちがいて、私はよくその子と遊んでいた。

高1のある時、それとなく彼の話題を振ってみた。私が安部くんを好きだということは、友だちにも秘密だった。だから、気付かれたくはなかった。

その友だちの話では、安部くんは警察に捕まったらしく、高校を辞めてしまったそうだ。

同じクラスだったがほとんど話もしたことないし、ちょっと普通から離れた存在になってしまったとも言っていた。だから、学校を辞めても誰も気にはしていなかったとか。

私は何だか、あの日々が遠い日のように思えた。もう手の届かない場所へ行ってしまったみたいだ。

私は胸をおさえて、動揺を悟られないことに必死になっていた。

高校を中退した一人の青年のことが、妙に虚しく思えた。

それは憧れが打ち砕かれたというような美しいものじゃなく、もっと現実的なもの。

何でこんなことになったんだろう、と。

二度と後戻り出来ない事実が、恐ろしく寂しく、冷たいようで。

その夜、風に当たりたくなり、ふとベランダへ出てみた。散り散りの星たちが、力なくほんのり輝いている。私は星に安部くんを映した。

黒の支配する闇の中、懸命に輝く星。あの人は、この満天の星空を見ているだろうか。

私とあなたを取り巻く環境は、いつの間にかひどく変わってしまった。

それでも、彼を包む周りが、どうか優しいものでありますように。
どれだけ辛いことがあっても、この星空を優しい気持ちで見えてい
られますように。

流れ星なんて絶対見えない都会の星にお願いしてから四年。

やっぱり、流れ星はあの時、流れていなかったようだ。

『安部くんが亡くなったので、お通夜を行うそうです。明日の夜…』

…』

何、コレ？

何かの冗談？

それともホントのこと？

疎遠になっていた中学時代の友人からのメールは、本当に嘘のよ
うに見えた。

ああホラ。エイプリルフール、と一瞬思ったが今は7月。季節外
れにも程がある。

うだるような暑さとかましいいセミの鳴き声で、私はメールの意
味をすぐに理解出来なかった。

しかし、何度か読み返すと、やっぱり安部くんは亡くなったみた
いだ。

変なの。

何だろう、信じきれない。

だってさ、まだハタチなんだよ？

病気とか？

まさか。

どういうわけか私は彼が病気で死んだのではない、と自信を持っ
ていた。

そんな簡単に死ぬような人じゃない……だからこそ、死んだとい
うことがうまくつかめなかった。

私は翌日のお通夜には、行かなかった。それに参加することで、
死が決定付けられると思ったから。認めたくない。そんな願いだと

か、祈りのような気持ちからだった。

私は3日ほど、宙ぶらりんに過ごした。

数日経った日の夜、私はあることを思い出すためにベランダに出てみた。

星に願ったあの日と同じように、紺色に白い点々が幾つも散っていた。景色も風の匂いも変わらないのに、あの日とは明らかに色んなことが違う。

私はもうあんなに幼くないし、何よりあの人はこの世にいない。彼を待ち受けた運命は、あまりに過酷なものだった。神さまなんていないよ、いたなら、安部くんはこうならなかったでしょう。それに、私だって恥をかなぐり捨ててでも想いを告白していたでしょう。

運命は、ちつとも優しくなくって、とっても残酷。目から溢れる涙をグイッと拭いて、私はもう一度夜空をあおぎ見る。

黒板消しから、全ては始まった。

新しいクラスになって初めてのレクリエーションの時、黒板消しを探していた私に気付いて、何も言わず差し出してくれた安部くん。まだ慣れないクラスに、一瞬で馴染めたような気がした。全然知らない人のことに、憧れを抱いた。そしていつしか、その憧れは好きという気持ちへ変わっていった。

あの黒板消しの距離はとうとう縮まらなかったけれど、もう永遠にあれ以上離れることはない。

今では本当に淡い恋だったと思う。でも、好きになったことに後悔なんてない。

それどころか、好きで良かった、そう思う。

安部くんは、ひと足先にどこか遠いところへ行ってしまった。もう生きている以上出逢えないくらい、遠いところに。

それでも、彼はきつとこの星空をどこかで見ているはず。私やみんなが忘れない限り、安部くんはみんなの心の中で息をしている。私はこれからも、ふわりと暖かい風が頬に当たったり、夜、空を見上げた時に思い出すだろう。

突然去って行った彼と、優しく淡い恋のことを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9422e/>

ノクターン【SS】

2010年10月8日15時15分発行